The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	甲田和衛名誉教授を悼む
Author(s)	
Citation	年報人間科学. 1994, 15, p. 195-197
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/5889
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

◇甲田和衛名誉教授を悼む◇

弔辞

友人代表・大阪大学名誉教授　徳永　恂

「甲田さん」と親しげに呼びかけるには、私はずいぶん年少の後輩でした。しかし今さら「甲田先生」とお呼びするのも、何かよそよそしい気がします。だから昔どおり今日も「甲田さん」と呼ぶことをお許し下さい。

甲田さん。あなたが体調を崩されてから、そしてその病いが唯ならぬものであることを自ら知られてから、何度かお目にかかることがありました。放送大学の学長室で、御自宅で。そしてそのたびに弱られてゆく御姿を見て、今日の日を予期しないではありませんでしたが、今こうして御写真に向い合って立ちますと、今さらのように胸を引きちぎられるような気がします。しかし今日は出来るだけ波立つものを抑えて、そこばくの想いを、想い出を、形に捉われずに語らせていただきたい。

私が、当時甲田さんが教授をしておられた大阪大学文学部に、隣接講座の助教授として赴任してきたのは、昭和四十三年の春でした。ちょうどいわゆる学園紛争がたけなわになろうとする頃で、それに続く人間科学部の創設を含めて、疾風怒濤とも言える動乱の時期を、かたわらにあって苦楽を共にさせていただきました。当時すでに実質的には副学長のような地位におられたのだと思いますが、乱世の雄とでも言うべき甲田さんの活躍は目覚ましく、敢えて争いを避けず、また必要な妥協も避けない甲田さんの柔軟な強靭さとでもいったものを、私は仰ぎ見ていたような気がします。ただいわゆる鷹派として筋を通すことは、或る意味では易しいかもしれない。しかし甲田さんのようにいわゆる鳩派として筋を通そうとすることには輻湊した努力、屈折した想いがからんでいたように思います。

紛争の季節が過ぎ、人間科学部が出来、バラック建ての学生食堂で卒業生の謝恩会が催されたことがあります。その時甲田学部長は、

次のような訓辞を述べられた。「諸君はこれから社会に出てゆくわけだが、そこでいつか諸君は上役と衝突することがあるだろう。その時どういう態度をとるか。じつはそこから諸君の人生が始まるのだ」。これまでどこの学部長が、卒業生に、こういう餞けの言葉を贈られたでしょうか。総理府の研究所から大阪大学への甲田さんのキャリアの中で、個人的な体験の裏打ちがあって、はじめて言える言葉の重みが、そこに感じられるように思います。こういう「反骨精神」が甲田さんの生涯を貫く剛直なバックボーンをなしていたと言えましょう。しかし阪大で二度の学部長をされ、放送大学で副学長や学長という、いわばトップの地位に即かれた時に、この反骨精神は、どういう形で発揮されたのでしょうか。放送大学でのことは、私には推測するよすがもありませんが、少くとも最晩年の、ほとんど常人には耐えがたい長い闘病生活の中で、病魔との不屈の戦いのうちで、それは最後まで貫かれたのではないかと想像されます。

甲田さんは、けっして単純な方ではありませんでした。学校行政での、或いは人間関係での強者という面と同時に、一面では大変情に篤い涙もろい面も持って居られたと思います。或る弟子の一人は「私は甲田先生に師を求めたら父を與えられた」と述懐したことがあります。酒席での事でしたが、私は「甲田さんにおける叙情的マキアベリズム」などと言ってからかった事があります。ずい分ひどい事を言うと思われる方があるかもしれませんが、私は必ずしも悪い意味でそう言ったつもりはありません。言葉を変えれば、甲田さんの中には、政治学と美学とが、不統一な形で併存していたと言ってもいいかも知れません。

そういう美学は、まず趣味的な面で発揮されました。甲田さんが阪大を定年で辞められる時、同時に辞められる先生方を囲んで、文学部の仲間たちと、熊野路の旅をしたことがあります。その時、潮の岬の宿で、一つ句会でもしようではないか、という事になった。その時……特に名を秘しますが……「熊野路や、山の向うは海だった」といった愛すべき句を創られた先生も居られた中で、甲田さんが詠んで、後で私に色紙にして下さった句は、「送らるる身は熊野路の返り花」。返り花とは、春咲いて又秋に咲く草花の事でしょうか。甲田さんの句には、よくたしなまれた書と同じように、一種独特の風格ある味わいがあったように思います。

しかし甲田さんの美学が、もっとも際立って発揮されたのは、じつは学問の中だったのではないでしょうか。甲田さんは早くから社会調査の中に、当時としてはもっともハイカラな数学的手法を導入してデビューされた方だと聞いております。しかしフィールド全盛の時代にも、甲田さんは阪大の社会学の学生にも、みだりに社会調査はさせませんでした。「調査というものは、学生などにできるものではない。」こういう厳しさの中には、或る誇り、ダンディズムを混えた美学が働いているように思います。そしてそれは御自身の学問的研究に対する態度の中に、もっとも厳しく表われていた。甲田さんの博士論文は、インドのカーストに関するものでした。これは学問的だけでなく人間的にも、甲田さんの畢生のテーマだったのだと思いますが、それを出版しようという我れ我れに対して、甲田

さんは遂に許可を与えられなかった。「あれはまだまだ不完全で磨き方が足りないんだ。」磨きをかける時間は甲田さんの晩年には遂に与えられなかった。その事、そしてそれにも拘らず、「たとえ不完全でも、あれはあれでよかったんだ」という言葉を、直接甲田さんの口から聞けなかった事を、私は最後の心残りだと思っております。

大阪城の主、太閤秀吉の辞世の句として、「見るべきほどの事は見つ」という言葉が伝えられております。この言葉は、太閤ならずとも、たとえどんな草の根の民であっても、もしそう言えるなら、……神の救いを請わずとも……人間が死ぬことのできる唯一の言葉ではないかとひそかに思っておりますが、私はこの言葉を甲田さんに捧げたい。その意味で、長い戦いの連続だったかも知れませんが、一筋を貫かれた立派な生涯であったと思います。

どうか今はゆっくりとお休み下さい。いずれ私たちがお訪ねするまで、独酌の盃を傾けていて下さい。ではそれまで、御気嫌よう。

長いこと蕪雑の言辞を連ねてきましたが、これを以って弔辞に代えさせていただきます。

一九九三年九月二十六日